

農家の肩の痛み研究

弘大と全農県本部 大規模MRIデータ収集、解析

弘前・岩木健診で地区住民に1年かけ

健康面から営農支援

リンゴ生産者は腕を上げながらの作業が多いために、肩関節の痛みや腕が上がらないなどの症状に悩まされることが多い。この予防と早期治療を目的に弘前大学と全農県本部は今年度、これらの要因である肩胛板の損傷について大規模にデータを収集して解析する研究に取り組む。調査は弘前市岩木地区の住民を対象に6月に行う岩木健康増進プロジェクトの健診でMRI（磁気共鳴画像装置）検査を取り入れて実施。生活習慣との関係も調べながら1年ほどをかけて解析・研究を進める。全農県本部は結果を基に啓発・周知に取り組み、営農継続を健康面から支援していく。

（石田紅字）



27日に弘前大医学部の健康未来イノベーションセンターで同大大学院医学研究科の中路重之特任教授と同研究科整形外科講座の石橋恭之教授、全農県本部の桑田徳文本部長、笹森俊充副本部長が報道発表した。よつになつており、腕を回転させる上での支点をつくる筋肉、一つ切れると次々切れてしまふ、二つ、三つと切れると腕が上がらなくなる。肩関節の動作の際に関節を

肩胛板損傷の研究に向け手を取り合う（左から）石橋教授、中路特任教授、桑田本部長、笹森副本部長

安定させるのに重要な構造といふ。MRIは筋組織の萎縮や関節軟骨の変性といった肩関節全体の観察ができる長所がある一方で、費用面がネックとなり、肩胛板損傷についてはこれまで大規模な疫学研究は行われていない。岩木健診のように地域住民を対象に大規模にMRI



Iデータを集めての研究は全国的に見ても初めてであり、岩木健診の特徴である生活習慣に関連するさまざまなデータや疾患関連因子（年齢や性別、職業の影響、喫煙、飲酒など）の検査

今年度の岩木健診は6月3日から10日間実施。肩胛板の研究はMRIの移動式車両を用いて、40歳以上で希望する参加者を対象に利き手側の肩関節のMRI検査を行って有症率を算出する。データの収集数は200〜300人を見込む。中路特任教授は「われわれのプライドはリンゴであり、農業が基盤、短命県であつていいはずがない。まず肩胛板損傷がどういふものか知ってもらひ、予防法を一緒に学んでいきたい」とあいさつ。石橋教授は「リンゴ農家は肩を酷使している。痛いのが当たり前だと思つて放置している人が多く、治療できない状態になってから受診する人も多々いるので、早期に見つけて予防していくことが目的。ひいては寿命延伸にもつなげたい」と力を込めた。全農県本部の桑田本部長は「この数年、農業に関わる高齢化と担い手不足が大きな問題。生産者を健康面で何かしらサポートできるのではとの思いから支援することになった。病気のことを知らない人にも広く認知してもらひ、早期治療をして健康増進につながることを期待する」と述べた。